

# 深草遺跡 別当十三塚遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

1988・3

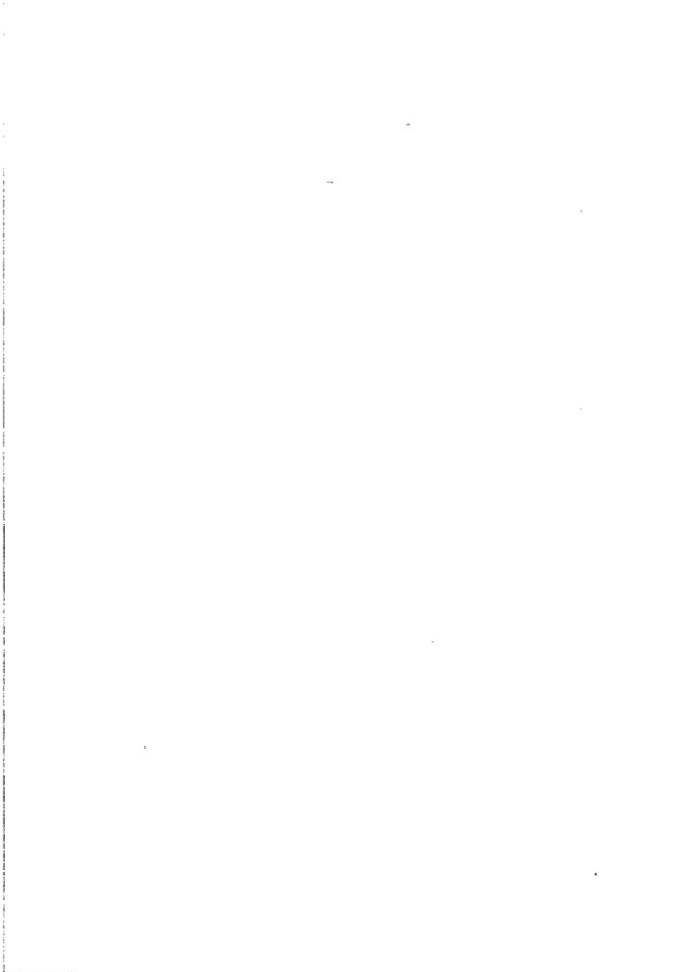
長坂町教育委員会  
峡北土地改良事務所

# 深 草 遺 跡 別当十三塚遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

1988・3

長坂町教育委員会  
峡北土地改良事務所



## 序 文

私たちの町、長坂には古くから多くの人々が住み、生活して来ました。その痕跡として非常に数多くの遺跡が発見されております。

一方で、近年の社会の急速な発展は長坂町の産業構造をも変えてしまいました。そのために、農業の振興を計る目的で圃場整備事業が進められております。

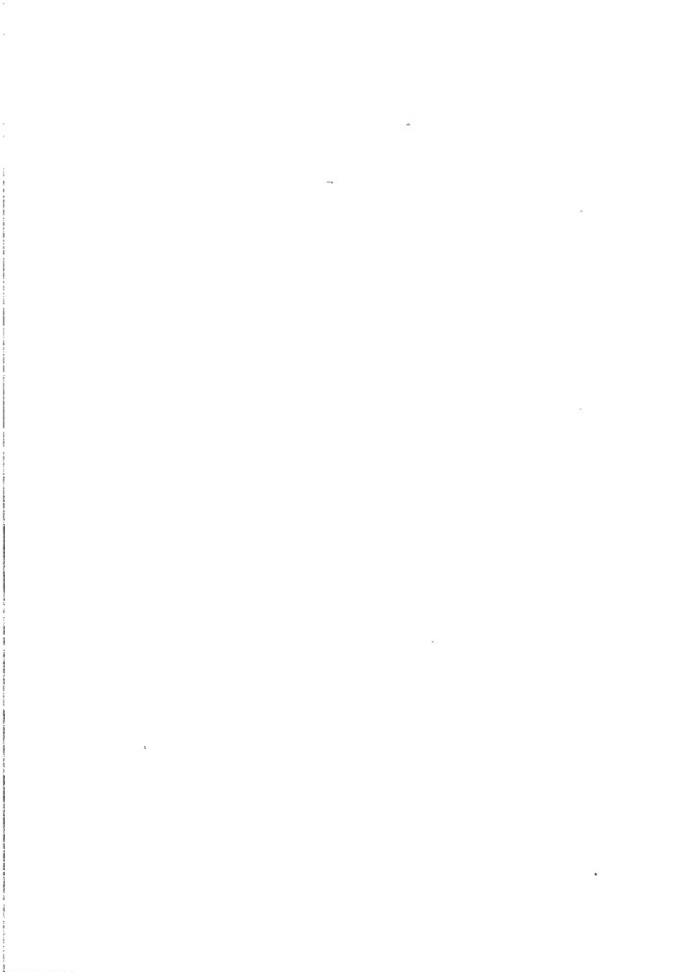
このため、長坂町教育委員会では圃場整備事業に伴う記録保存のための埋蔵文化財の発掘調査を行っています。本年は、大八田地区の、別当十三塚遺跡・深草遺跡の調査を行い、主に中世の遺構・遺物が検出されました。ここに、その成果を報告書として刊行しました。研究者はもとより、一般の方々にも広く活用していただければ、幸いに思います。

最後になりましたが、今回の調査にあたり、御指導御協力いただきました、県教育庁文化課、峡北土地改良事務所、それに地元、大八田地区の皆様へ深く感謝いたします。

昭和63年3月

長坂町教育委員会

教育長 向 井 正 汎



# 例 言

- 1、本報告書は昭和62年度県営両場整備事業に伴う別当十三塚・深草遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、本調査は峡北土地改良事務所との負担協定に基づき、文化庁・山梨県より補助金を受けて長坂町教育委員会が昭和62年5月15日から同7月29日にかけて実施した。
- 3、本書の執筆・編集は櫻井真貴が行った。
- 4、別当十三塚出土の人骨については聖マリアンナ医科大学の森本岩太郎教授、工藤広幸助手に鑑定を依頼しその結果を別編として巻末に集録してある。
- 5、本調査の出土遺物・発掘記録等はすべて長坂町教育委員会において保管している。

- 6、調査組織
- |       |               |
|-------|---------------|
| 調査主体  | 長坂町教育委員会      |
| 教育長   | 向井 正汎         |
| 課長    | 平島 松尾（6月30日迄） |
|       | 小林 希望         |
| 事務局員  | 坂本 正輝         |
|       | 平島 長生         |
| 調査担当  | 櫻井 真貴         |
| 調査参加者 |               |

小沢三七子、小沢茂美、小沢すみ子、小沢ふく子、小沢みずえ、小林光子、小松かずえ、滝田武子、日向一子、平嶋弘子

- 7、発掘調査から本書の作成までに下記の方々・機関から御指導、御助言を賜った。記して感謝の意としたい。（願不同 敬称略）

新津 健、米田明訓（山梨県教育庁文化課）田代 季、末木 健、八巻与志夫（山梨県埋蔵文化財センター）中田 英（神奈川県教育庁文化財保護課）上本進二（神奈川県立埋蔵文化財センター）清水 博（撫形町教育委員会）山路恭之助（須玉町教育委員会）佐野勝広（小淵沢町教育委員会）日向鉄夫（県営両場整備長坂地区Ⅱ工区会長）峡北土地改良事務所

# 目 次

序 文	
例 言	
第Ⅰ章 調査に至る経緯	7
第Ⅱ章 調査の方法と経過	8
第Ⅲ章 周辺の地理的歴史的環境	8
第Ⅳ章 別当十三塚遺跡の調査（付図1）	14
第Ⅴ章 深草遺跡の調査（付図7）	21

## （附編報告）

長坂町別当十三塚出土人骨について	26
------------------	----

図 版

## 第 I 章 調査に至る経緯

山梨県では昭和54年より水田利用再編対策の推進、農地を流動化し集積することにより機械化・省力化を促進し、作物体系の確立等の農業生産基盤の整備を行い農業の振興を計る事を目的として、奥宮圃場整備事業が推進されている。北巨摩郡においても各町村で毎年大規模に行われている。

長坂町では昭和58年度より県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の調査が実施されている。昭和58・59年には小和田館跡、60年には小和田北遺跡を、61年には別当十三塚遺跡、別当遺跡、深草遺跡、菅屋敷遺跡の4遺跡の調査が行われ縄文時代から平安時代・中世にわたる各時代で大きな成果をあげている。

本年度も第 I 工区、白井沢地区と第 II 工区、大和田地区において圃場整備が行われる計画になった。そこで、本教育委員会では昭和61年12月から62年1月にかけて試掘調査を行った結果第 I 工区では遺構・遺物ともに検出されなかったものの、第 II 工区の深草遺跡において遺物の出土を見たため本調査の必要があると判断された。また、別当十三塚は塚自体の平面図の作成は完了しているものの、塚全体の半分にあたる5基の断ち割り調査が行われていないため、それを行わなければならない。

以上の様な結果から、本教育委員会では山梨教育庁文化課と峡北土地改良事務所の三者で協議を行い、本格調査を実施する運びとなった。調査対象面積は4300㎡、調査主体は本教育委員会があたることとなった。

昭和62年1月7日に昭和62年度文化財関係国庫補助事業として県教育委員会へ計画書を提出し、同4月27日付で交付内定を受け、同6月13日に補助金交付申請書を提出した。また、同6月1日には本教育委員会と峡北土地改良事務所との間で負担協定を締結し、埋蔵文化財発掘調査実施計画書を提出した。

調査は、昭和62年5月15日に開始し、同7月29日に現場作業を終了し、昭和63年3月31日に整理等の全ての作業を終了した。



## 第Ⅱ章 調査の方法と経過

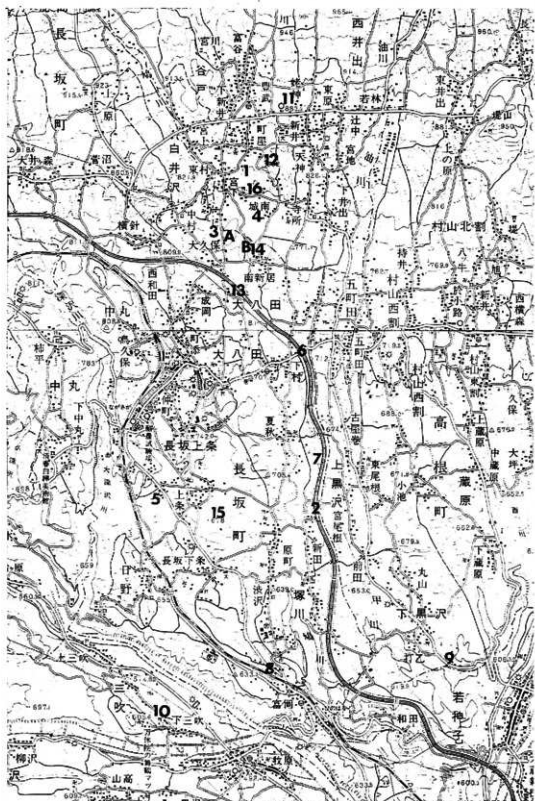
本年度の調査は両遺跡共、昨年度調査された部分の北側の続きの部分について調査を行った。別当十三塚遺跡は、5月15日より調査を開始した。塚自体の平面図は昨年度に作成されているので、まず断面図を作成し、その後塚の下部の遺構を調査する、という手順で進めた。その結果塚の下部から土坑が二基検出され、遺物は古銭と土師質土器片が数点出土した。また、塚本体の調査終了後塚周辺にトレンチを入れて他の遺構・遺物の検出につとめた。しかし、遺構・遺物共に全く検出できなかった。以上の調査は、6月2日に終了した。

別当十三塚遺跡の調査が終了した翌日からは、深草遺跡の調査を開始した。調査は磁北にあわせて10mグリッドを設定して行った。遺構は、溝状遺構が1本と土壌が3基検出された。遺物は量は少ないものの、縄文時代から近世に至るまでの長い時期の遺物が出土している。本遺跡は7月29日に調査を終了した。

## 第Ⅲ章 周辺の地理的歴史的環境

長坂町は山梨県北巨摩郡の中央やや西寄り、八ヶ岳の南側に位置し、北は権現岳の頂上で長野県に接している。町の大部分がある緩斜面は第Ⅳ期初頭に噴火した八ヶ岳の山体崩壊期に発生した泥流（韭崎泥流）によって形成された台地である。この泥流はかなり大規模なもので最大層厚は約200mほどあり甲府盆地の南縁部にまで達している。現在では大部分が侵食されてしまい甲府盆地内ではほとんど見る事ができないが、曾根丘陵の一部にその痕跡を見ることができる。さて、この台地は東側を須玉川や塩川で、西側を釜無川（富士川）によって侵食されている。特に西側は100m近くの切り立った崖が韭崎市から白州町の長野県境まで20数kmにわたって釜無川沿いに続いており、通称七里岩と呼ばれている。またこの釜無川沿いは、フォッサマグナ（大地溝帯）の西縁、及びその西縁上に糸魚川・静岡構造線が通っている。この七里岩の上は台土と呼ばれて釜無川をはさんで南アルプス山脈と対峙している。

さて、この台上的緩斜面、すなわち長坂町周辺には環境庁の選定した名水百選の一つ、八ヶ岳南麓湧水群があり多くの泉が湧出している。これらの泉から流れ出た小河川は南下しながら合流を繰り返していくつもの小尾根を作り出している。また、この河川は澁水期にも極端な減水は無く年間を通じて安定した水量を保っている。さらに、この斜面は南向きで極端な起伏も無く日照時間も長い。この様なことからこの尾根上には非常に数多くの遺跡がある。だが、遺跡の数は多いもののその時期は非常に偏っている。長坂町周辺の遺跡の時期は縄文時代中期と平安時代、それに中世の三つの時期で大部分を占める。これら以外の時期のものも奈良時代以外



第1図 周辺の遺跡

はあるにはあるのだが、他の時代のものと比較すると極端に少ない。また、奈良時代の遺跡は遺構、遺物共に台上ではまだ確認されていない。この、時代による極端な差は気候の変化や火山の噴火に伴う火山灰の降下、それに律令体制に伴う公権力の介入による規制などが考えられる。

従来、八ヶ岳南麓は縄文時代中期の遺跡の宝庫として知られてきた。確かにこの時期の遺跡数は他を圧するものがある。そしてその理由は、森林が多く動物、植物が豊富で食物が得やすい、水が豊富であることなど諸説が述べられてきた。その一方で近年平安時代の遺跡の豊富さが論じられ始めている。

それでは、原始・古代の嶽北地方とはどのような所であったのであろうか。山梨県が歴史上の記録に初めて登場するのは日本書紀の雄略天皇13年に甲斐の黒駒という表記あるのが初めてである。つまり、この時期には中央朝廷には甲斐は名馬の産地として知られていたのである。そして平安時代になると嶽北地方には三つの官牧が置かれることになるのである。すなわちその三官牧とは高根町念場原あたりに置かれたとされる柏前牧、武川村牧原あたりに置かれたとされる真衣野牧、韭崎市穂坂あたりに置かれたとされている穂坂牧である。そして、近年調査された高根町湯沢遺跡や、武川村宮間田遺跡はこれらの牧に関連するものとして注目された。

山梨県は古代律令時代には巨麻、山梨、都留の3つの郡に分かれていたとされている。長坂町周辺の嶽北地方は巨麻郡に属していた。この巨麻郡という地名は「和名抄」に出てくるもので山梨県の西側一帯を占めていて、現在の北巨摩郡、中巨摩郡、南巨摩郡と韭崎市、甲府市それに西八代郡市川大門町の一部であったといわれている。そして、この巨麻郡の中には九つの郷が置かれていた。この郷の位置については、磯貝正義氏の説によれば、北巨摩には速見・真衣の二つが置かれていたとされている。近年では他にいくつかの異説も発表されているが、ここでは磯貝氏の説に従っておく。さてそこで、速見郷と真衣郷の位置であるが真衣郷は真衣野牧の存在が示す通り武川村周辺にあったと考えられている。一方速見郷は速見神社・速見筋などの呼称から長坂、高根、須玉、明野周辺に置かれたのではないかとされている。すなわち速見郷は柏前牧に対応して置かれていたものと思われる。つまり、長坂町周辺は速見郷に含まれていたと考えられる。この様に考えてくると、この付近に平安時代の遺跡が多いことが納得できるのである。つまり、官牧の周辺にはそれを管理する役所、牧監がおかれそれに付随する集落が成立するわけである。この様に北巨摩地方に平安時代の集落が多く検出されるのは、官牧と関連して開発が行なわれた結果ということができるのであろう。

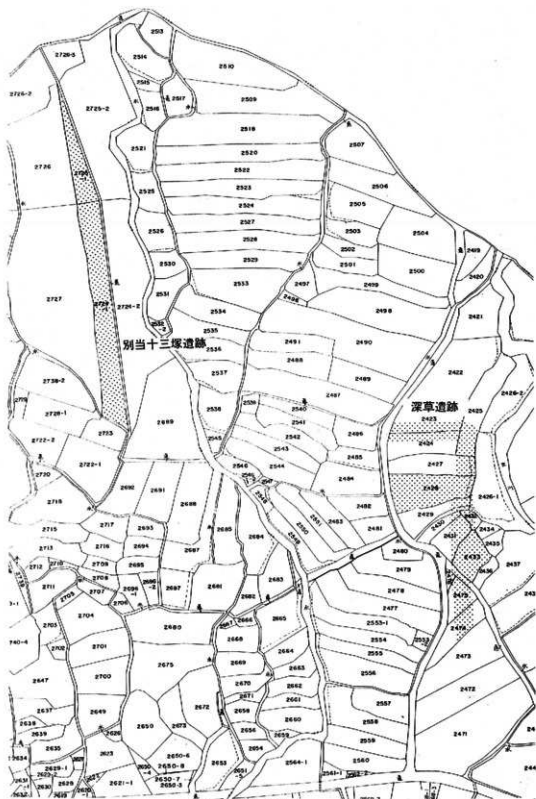
ところで、巨麻郡の名称であるが、これにはいろいろな説がある。1つには渡来人と関連があるという説があるのである。すなわち大陸の高句麗が滅亡した後に高句麗人が多く日本に渡来し巨麻郡のあたりに居住して高麗が転じて巨麻となったとする説である。また、牧との関連で駒が転じて巨麻となったという説もある。

古代においては以上の様な歴史的な経過と背景を持っていたわけであるが、それでは中世にはどのような様子であったのだろうか。

山梨県の中世は武田氏の時代であるといっても過言ではない。武田氏の祖先は甲斐源氏といひ清和源氏の一族であった。この一門のうちの清光は峡北地方の逸見荘に本拠を置いたため逸見冠者などと呼ばれた。ここは三官牧に近くまた信州の佐久地方への街道筋にあたり交通の要地でもあった。つまり、この場所を押えたということにより権力を拡大するのに恰好の場所を得たということであったといえるであろう。そのため勢力を拡大し、清光は子供を甲斐国内の要地に配した。そのうちの信義は武河荘武田（現在の韭崎市）に本拠を置き、武田氏をなごった。これが12世紀中頃のことである。そして子孫は代々甲斐の守護となったといわれている。この後平安時代末期は平氏が栄華を極めるが、その平家打倒にも甲斐源氏は大きな役割を果たすのである。その中でも重要なものは、有名な富士川の合戦である。この合戦は甲斐源氏武田信義らによって主導権が握られていたのである。この様な働きにより、鎌倉幕府成立後有力な守護となっていた。そして、鎌倉幕府滅亡後、武田氏によって甲斐国は統一された。

それでは、周辺の遺跡を時代順に見ていく。

①は山梨大学考古学研究会が中心になって発掘調査を行った御所遺跡である。この地方では珍しい縄文時代前期、諸磯式の時期の遺構・遺物が発見されている。②は中央高速道路の建設に伴い調査された頭無遺跡である。ここでは主に縄文時代中期曾利期の遺構・遺物が発見されている。③は県営園場整備に伴い昭和60・61年度に本町教育委員会にて調査を行った別当遺跡である。ここでは縄文時代後期壱の内I式期の竪穴住居、敷石住居等の遺構と遺物が検出されている。④は県営園場整備事業に伴い調査され、現在その一部が国の史跡に指定され保存されている金生遺跡である。ここからは縄文時代後期の配石遺構・配石墓・敷石住居等の遺構や、土器・石器・石棒等の遺物が検出されている。⑤は戦前の昭和15年に大山柏を所長とする大山史前学研究所によって調査された長坂上條遺跡である。ここでも、縄文時代晩期の遺構・遺物が検出されている。また弥生時代の遺物も検出されている。⑥は中央高速道路の本線や長坂インターチェンジの建設のために調査された柳浮遺跡である。ここでは、本県内はおろか東日本一帯でもあまり発見されていない弥生時代中期初頭の条痕文土器を伴う住居や、弥生時代後期・古墳時代前期・後期の集落を中心に縄文時代中期から平安時代、中世までの長い時代の遺構・遺物が発見されている。⑦は天王塚古墳で馬具や武具・金環それに須恵器などが出土したと伝えられるが現存していない。⑧は三ツ墓古墳である。もともとは三墓あったが、中央線敷設の際に二墓が破壊されてしまい、現在は一基が残るのみである。⑨は湯沢遺跡で、県の土地開発公社の開発に伴い調査されたものである。ここでは平安時代の掘立柱建物跡が多数検出されて、柏原牧との関連が注目されている。⑩は宮間田遺跡で、県営園場整備事業に伴い調査された。ここはやはり真衣野牧との関連が注目されていて、多くの平安時代の遺構・遺物が出土している。特に「牧」の墨書された土師器の坏は注目される。⑪は東姥神B遺跡である。これも県営園場整備事業に伴い調査された。ここでは平安時代の掘立柱建物跡を伴った集落と中世の土壌が検出されている。遺物の中で注目されるものは、「安雲」の墨書を持った甲斐型の坏であ



第 2 图 調査区域

る。これは、安曇氏や長野県の安曇地方との関連が注目される。12は谷戸城跡である。城主は甲斐源氏の清光であったと伝えられているが確証はなく不明である。城の構造は土塁にかこまれた主郭を中心に五つの郭がとりまき、さらに西側には土塁と空堀を持つ郭がある。昭和56年には郭の一つが発掘調査され、14～5世紀の遺物が発見された。13は昭和58～9年に県営圃場整備事業に伴い本町教育委員会により調査された小和田館跡である。ここには、栗研堀に囲まれていて内部をさらに小堀によって区画した複郭構造の館本体と栗研堀の外の外郭部があり双方から多くの遺構・遺物が発見されている。館自体は西側の堀の一部とその周辺を調査したのみであるが、石組井戸、地下式溝、ピット群などの遺構とともに美濃製の犬日茶碗・鉄軸水滴・「木原新七郎」の銘が篆刻された方形の硯・内耳土器などが出土している。また外郭部では、竪穴式遺構・掘立柱建物跡・方形石組遺構・石組土壇などの多くの遺構が発掘され、さらに三箇所から古銭が合計6,000枚出土している。しかもそのうちの一つは古瀬戸の四耳壺の中に約3,000枚が残存状態の良好なわら紐に束ねられて出土した。古銭は唐銭、北宋銭などの舶載銭であった。それ以外にも水滸や和鏡などが出土している。また翌60年に外郭部の北方で調査された小和田北遺跡では方形竪穴遺構の中から銅製の椀蓋が出土している。さらに栗研堀の南辺部は現在でも埋まりきらずに幅5m、深さ3m位の堀が地表でも確認できる。これら以外にも縄文時代中期格沢期の住居や、平安時代の集落も検出されている複合遺跡である。なお、館本体の中核部は63年に調査予定である。14は深草館跡である。現状は周囲を高さ1～2mの土塁に囲まれ、内部もさらに土塁で南北に区画した複郭形式である。その外側を空堀と自然河川を利用した堀がめぐっている。昭和55年に県教育委員会で金生遺跡を調査した際に館の北外郭部を発掘調査をした。その時には15～17世紀の掘立柱建物址や地下式溝などの遺構や瀬戸美濃系の陶磁器や中国製の陶磁器などの遺物も出土した。現在は長坂町指定の文化財として保存されている。15は長坂氏館跡である。現在山林の中に空堀と土塁が略方形にまわっている。伝承では武田家家臣の長坂長閑斎の館跡とされているが、定かでない。これも、現在は長坂町指定の文化財として保存されている。16は前林十三塚である。山の尾根部に径3m前後、高さ1m程の塚が10数基並んでいる。

以上が長坂町を中心とした地域の主な遺跡である。これら以外にも調査済みのもの、未調査のものを含めて数多くの遺跡が眠っている。今後、圃場整備事業や観光開発・企業の進出などで破壊の危機にさらされるものが多く出てくると思われるが、その保護対策は急務であり重要なものとなるであろう。

※ 峡北地方とは北巨摩郡と韮崎市を合わせた呼び名である。他にも峡西・峡中・峡南・峡東などの地方名がある。

## 第IV章 別当十三塚遺跡の調査（付図1）

本年度は昨年度に引き続き6号塚から10号塚までの調査を行った。本塚群は尾根上に南北にほぼ一列に並んでおり、南から順に塚の番号が付けてある。また南側が低く北側が最も高くなっている。そのため本文中の山側とは北側を表わし、谷側とは南側を表わしている。塚本体以外に見えられた遺構は土壌が2基のみである。土壌からは人骨は検出されず、掘り込みも浅いので墓である可能性は低いと思われる。また遺物は8号塚上の板碑以外には、封土中から図示不可能な陶磁器の細片が出土している。本文中でもふれているが、塚自体の遺存状態は非常に悪く、ほとんど塚としての形態を残していないものがあった。では、以下で塚一つ一つについて述べてゆく。

### 第6号塚（付図4第3図）

本塚は塚群のほぼ中央に位置している。東西径は約6.5m、南北の径は約5.5m、封土の高さは谷側からは最大で約1mを計る。山側からでも0.2mを計る。土層は6層に分かれ、それを観察すれば山側は腐植土によって封土の裾部がかなり埋まっているのがわかる。また、封土を取り去った後の塚の下部中央やや南寄りから径約1m、深さ約0.2mの土壌が検出された。遺物については特に何も検出されなかった。

### 第7号塚（付図4第4図）

本塚は東西径が約7.4m南北径が約5.6mを計る。封土は山側からは、ほとんど盛り上がりがない。谷側からでも0.5m程で、かなり崩壊が進んでいると言えよう。土層は6層に分層でまた封土下からは、径約1m深さ約0.2mの土壌が検出された。

### 第8号塚（付図5第5図）

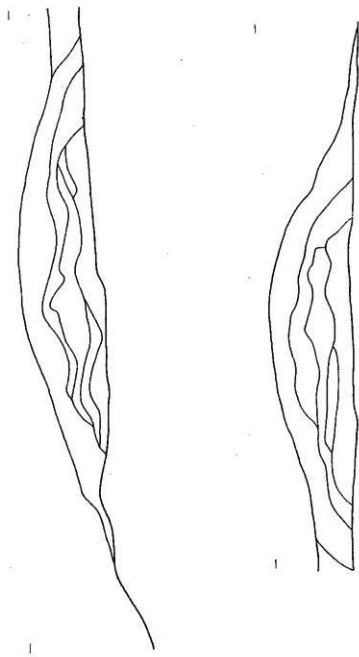
本塚は東西径が約5.5m南北径が約4mを計る。遺存状態は極めて悪く塚上の板碑によって塚と認識した程である。土層は3層に分層できた。

### 第9号塚（付図5第6図）

本塚は東西径が約3.6m南北径が約3.7mを計りやや小型である。土層は3層に分かれる。やはり遺存状態は極めて悪く肉眼で地表から見たかぎり、塚として認識できる限界であったと言えよう。

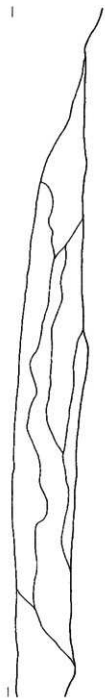
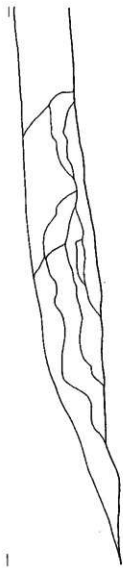
### 第10号塚（付図6第7図）

本塚も遺存状態が悪く目視では塚であるといことの認識はほとんどできず、確認は等高線によって行った。土層は4層に分かれる。封土はかなり流されてしまった様に見受けられる。土壌等の遺構は検出されなかった。

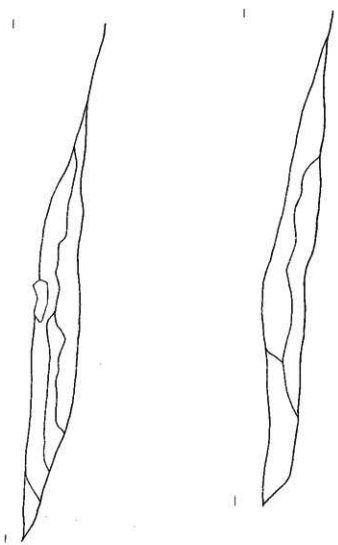


第6号塚 土層断面図(1/40)

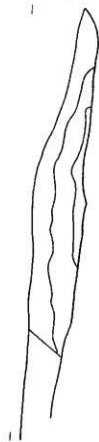




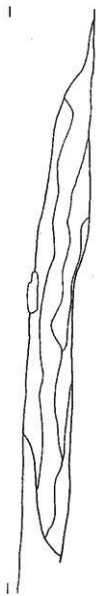
第7号煤 土层断面图 (1/40)



第8号塚 土層断面図 (1/40)



第9号塚 土層断面図(1/40)



第10号塚 土層断面図 (1/40)

## ま と め

昨年度及び本年度にわたり本遺跡を調査したわけであるが、塚以外の遺構は溝が1本と土壇墓が1基それに土壇が2基検出されたのみである。また、遺物も13~14世紀代の年代が与えられる陶磁器の小破片が少量と舶載銭が数枚出土したのみである。つまり築造年代こそ14世紀代をあまり下らない時期であると言えるものの、遺構・遺物ともに貧弱である、と言えるであろう。さらに、これらの遺構が塚築造に伴うものか否かがはっきりしないので遺物の面からも十三塚の性格をつかむことは不可能であるといえる。

そこで、各地の事例を検討してみると十三塚は村境等の土地区画の境界部分に作られるものが多いということを古くから十三塚を研究していた柳田国男が述べている。また、地籍図を調べてみると十三塚の部分だけは細長く不自然に別の地番になっていることがしばしば見受けられる。さらに、各地の十三塚をみると一例に並んだ塚の中央の一つが特に大きいとい例がかなり多い。また、その性格については供養塚であるとか、十三仏信仰に関するものであるとか、墓地であるなど諸説があり定まっていない。また各地の十三塚において種々の言い伝えは残っていても、その築造目的や性格をつかむ手掛りになる様なものは皆無であるといってよい。

そこで、別当十三塚を見てみると確かに本十三塚を乗せている原田山の北端は大泉村との町村境に接している。また、地籍図(第1図)を見ると十三塚の部分だけ細長く地番が違うのがわかる。つまり、この十三塚は近代以降も何か特別な場所として付近の住民に意識されていたと考えられるのである。また、本十三塚においても中心付近の6号塚の規模が大きい。もっとも、本十三塚においては全体的に塚の遺存状態が悪く、ほとんど塚としての形態をとめないものもあることから一概に6号塚が大きいとはいえず単に遺存状態の良不良という問題かもしれない。それでは、本十三塚の性格とはなんであるか。人骨・五輪塔・板碑などの出土遺物から墓地または供養塚などと考えられやすいが、その出土状況から遺物と塚自体のつながりは薄く、むしろ無関係であるとするらいえるのではないかと思う。

そこで1つのヒントとなるのはこの付近の中世遺跡の多さである。谷戸城跡・深草館跡・小和田館跡を始めとして数多くの中世遺跡がある。これらの遺跡との関連、つまり当時の豪族等の権力者層との関連が考えられないかと言うことである。なぜなら当時の土木工事としては決して小規模であったとはいえないであろう、十三塚築造に当時の指導的な立場にある者が何らかの形で関係していたと見るのはむしろ自然な事ではないであろうか。しかし現在までにその証拠となる事実は発見されていない。そのため、あくまでも推論でしかない。だが、これらの各遺跡の存続年代と本十三塚の築造年代が重複する以上全く無関係とは言いきれないであろう。そして、今後は他の分野、特に文献史学との学際的な協力によってこそ十三塚の目的が解明されるのではないかと思うのである。

## 第V章 深草遺跡の調査（付図7）

本遺跡は町指定の文化財、深草館跡のすぐ西側に位置しており館跡との関連が注目された遺跡であった。本年度は、昨年度の調査区の北側の延長部分の調査を行った。しかし、後述する様に今年は遺構・遺物共に検出量は極めて少なく、土壌が2基と溝状遺構が1本検出されたのみであった。遺物も縄文時代後期から平安時代、中世、近世と幅広い時期のものが出土しているが、その量は極めて少なかった。以下で遺構、遺物の順番で述べてゆく。

### 第1号土壌（第8図）

本土壌は2号土壌と共に調査区のほぼ中央の東寄り、つまり深草館跡寄りに位置している。大きさは径約1.7m、深さ約0.3mで、平面形はほぼ円形を呈している。土層は4層に分層された。底はほぼ平坦で東寄りの一部には、底直上に自然礫が10層程が置かれていた。他の人工遺物は出土していない。

### 第2号土壌（第8図）

本土壌は1号土壌の南側に1.5m程の間隔を持って位置している。本土壌はかなり削平されていて深さは最大でも0.2m程で、長径が約1.7m短径が約1.2m程の長楕円形を呈している。土層は4層に分層された。遺物は出土していない。

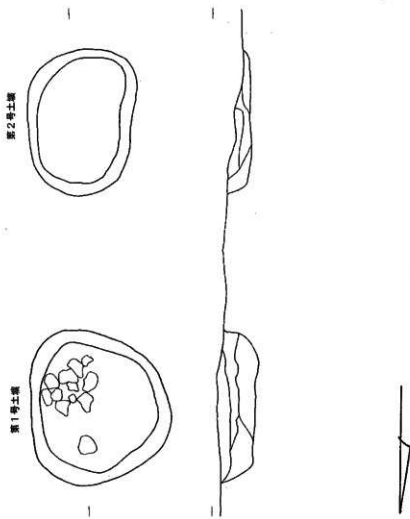
### 溝状遺構（第9図）

本遺構は調査区の北端部を東西に走っていて、調査区の西限から始まり攪乱へ消えている。西から東へ緩やかに傾斜している。現存長は約9mを計り、深さは0.5m程である。土層は5層に分層出来た。調査途中から西側で水が湧き始め、完掘時には量は少ないものの水が流れてしまい、まるで小川の様になってしまった。この様なことからこの溝の用途は排水用の水路ではなかったかと考えられる。出土遺物はない。

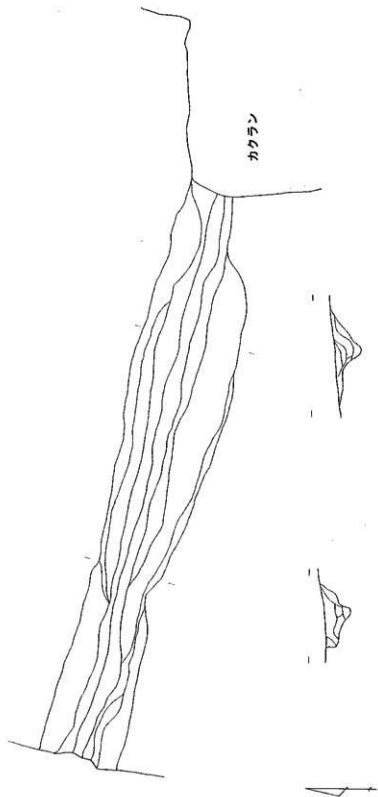
### 出土遺物（第10図）

本遺跡では遺構に伴う遺物は出土していない。しかし、遺構確認時に量は少ないものの、縄文時代から平安時代、中世に渡る広範囲の時代の遺物が出土している。だが、そのほとんどは小破片で水流によってローリングされ角が丸くなっているものすらあった。では、以下でその遺物についてそれぞれ述べてゆく。

1は、沈線の入った擦り消し縄文の土器でやや外反している。胎度は砂をやや多く含むが致密で焼成は良好である。縄文時代後期前半のものであろう。2は口縁部の破片でやや内湾している。外面には太い3本の沈線が回っている。胎土は小石と砂粒が少量はいるものの堅致で焼成も良好である。縄文時代後期中頃ののものであろう。3はやはり口縁部片で口唇部に小さな突起があり、口唇部は若干外反している。文様は口唇直下に沈線が1本回り、その下に刺突を繰り返した帯があり、その下に沈線が4本まわり、さらにその下にまた刺突が施されている。

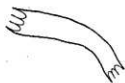
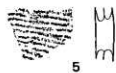
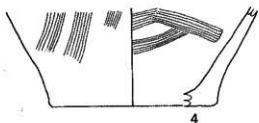
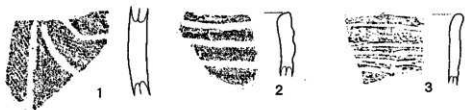


第8圖 深草遺跡土坑



第9図 深部通断層状遺構





深草遺跡出土遺物 (1/2)

沈線と刺突の工具は別の物であろう。胎土は小石を少量含み、黒雲母を微量含んでいるが、良く精製されていて緻密で焼成も非常に良好である。縄文時代晩期終末の大洞A'式並行のものであろう。4は、平安時代の壺型土器の胴下端から底部にかけてのものである。内面には密に、外面には粗く6本単位の刷毛による調整痕が、また底部には木炭痕が残されている。胎土には黒雲母がやや多めに、砂粒が少量含まれている。焼成は良好である。また、外面の一部には煤が付着している。5もおそらく平安時代の所産のものと思われる須恵器の小破片である。厚さ約1cm程で外面には叩き目が残されている。6・7は中世の所産と思われる酸化炎焼成のかわらけの底部片である。6は胎土に雲母と小石を含んでいる。7は雲母を少量含んでいる。焼成は良好であるが、7はやや軟質である。外面にはろくろ水引き痕と回転糸切りの痕が残されている。8は同じく中世のものと思われる灰釉陶器片で、備前産ではないかと考えられる。外面には窯印とおもわれる痕が残されている。9は小型の灯明皿である。復元口径は10cm、底径は1.8cmで口縁部は半残存している。底部には糸切り痕が残されている。近世の所産で18世紀位の時期のものと思われる。

以上が本遺跡において出土した遺物であるが、これら以外にも多くの遺物が出土している。しかし、その多くは無文の図示しえない小破片がほとんどである。また、それらの遺物を観察するとその多くは平安時代の土師器と中世、近世の陶磁器であった。

#### ま と め

以上述べたように本遺跡においては遺構は極めて少なく、また遺構からの出土遺物はない。そして、その遺構外出土の遺物の多くは平安時代のもの中世、近世のものが主体を占める。また、縄文時代の後晩期の遺物も検出されている。このことは、周囲にこの時期の遺構が存在することを示しているといえよう。確かに昭和63年度に調査が予定されている本遺跡の北側には試掘調査によって、縄文時代の敷石住居が確認されている。

ところで、本遺跡の遺構の検出状態を見ると確認面に砂礫が非常に多く検出されていて、まるで河川の跡の様であった。ローリングされた土器が出土しているのもこのためであると考えられる。この様なことから本年度の調査は遺構が水流によって破壊されてしまった部分を中心に調査してしまったと言えるであろう。

また、検出された遺構は遺物が全く出土していないため正確な時期はつかめないものの確認レベルや覆土の状況から、少なくとも中世以降であると考えられる。

# 長坂町別当十三塚出土人骨について

森本岩太郎・工藤宏幸

## I はじめに

昭和61年8月、山梨県北巨摩郡長坂町大八田字別当所在の別当十三塚遺跡4号塚から中世人骨1個体分が出土した。筆者は長坂町教育委員会からの委嘱によりこの人骨を調べたので、ここに報告する。

## II 人骨の出土状態

別当十三塚遺跡4号塚の西側半部にある1号土壇内から1個体分の人骨が出土した。人骨の上に中等度の大きさの石が2個置かれていたという。埋葬姿勢は北頭位の右側臥屈葬であり、人骨は解剖学的に自然な状態で位置している。副葬品、伴出遺物などはない。ただ4号塚の付近から五輪塔などが出土しており、この人骨も中世に属すると考えられている。

## III. 人骨所見

### 1) 人骨の残存部分 (写真1-2)

以下の各部分の存在が確認された。(Rは右を、Lは左を示す)

(a) 頭蓋片。 側頭骨(R) : はほぼ全体(先端部および茎状突起を欠く)。 側頭骨(L) : 鑰体、下顎窩を含む部分だけ。 蝶形骨 : 大翼基部を中心とする部分が左右各一部分。 頭頂骨(R) : 乳突角を含む後下方の1部分だけ。 後頭骨 : 底部および後頭顆基部(後頭顆自体は欠く)を中心とする一部分と、内外後頭隆起付近の一部分。 頬骨(R) : 前頭突起の外側半と側頭突起を欠く。 上顎骨(R) : 切歯および犬歯に対応する部位の歯槽および第2大臼歯より後方の歯槽と、上顎体後部を欠く。 下顎骨 : 右下顎頭、右筋突起先端、左下顎枝の上外側部、歯槽の1部を欠く。

(b) 椎骨片。 環椎の前弓と右外側塊の一部、軸椎の齒突起と右上関節面を含む一部分、部位不明の椎骨片3個。

(c) 四肢骨片。 鎖骨(L) : 胸骨端、肩峰端を欠く。 肩甲骨(R) : 肩甲骨基部のごく一部だけ。 上腕骨(R) : 上腕骨頭、外側上顆、内側上顆を欠く。 上腕骨(L) : 骨体下半だけが残存するが、後面を欠き骨髄腔が開放する。 桡骨(R) : 桡骨頭の外側半、桡骨粗面、および下端部を欠く。 尺骨(R) : 肘頭の上端、尺骨頭などを欠く。 尺骨(L) : 肘頭、尺骨頭などを欠く。 中手骨 : 4個残存し、そのすべてが頭と底を欠く。 指骨 : 6個残存し、そのすべてが頭と底を欠く。 大腿骨(R) : 骨体部と膝蓋面の一部。 大腿骨(L) : 上下両端を欠かし、また残存する骨体部もその下4/5の範囲の外側半を欠く。 脛骨(R) : 骨

体と上関節面の一部。 脛骨 (L) : 上下両端を欠如する。残存する骨体部はその全長にわたって前半部を欠き、骨髄腔が開放する。 膝蓋骨 (R) : 内側半を欠く。 腓骨 (R) : 腓骨頭および外果を欠く。

上記のうち、右側頭骨と蝶形骨の一部分と右頭頂骨、および左側頭骨と蝶形骨の一部分については、それぞれ縫合により連結可能である。また、右頬骨と右上顎骨は縫合の部分で骨性に結合している。

保存状態はあまり良好ではない。ほとんど全部の骨に小動物によると思われる咬傷が認められる。

## 2) 歯および歯槽 (写真1, 3-4)

歯および歯槽の状況を下に記す。

7	6	5	4	3	2	1	×	2	×	4	5	6	7	
7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

ただし、アラビア数字は永久歯が存在すること、×印は歯・歯槽とも欠損のため状況不明のことをそれぞれ表す。2|1| |2 4 5 6 7|の各々は遊離した状態で存在する。3は全長14.0 mmの矮小歯であり(写真3)、|2も軽度の円柱化を示す(写真4)。反対側の3|、|2は正常である。以上の歯とは別に、全長7.5 mmの矮小歯1個が遊離して存在するが、形態学的特徴に乏しいので、その歯種の同定は困難である(写真4)。

歯の咬耗度は、3を除く切歯と犬歯がMartinの第2度、臼歯が第1度、3が第0度である。歯石が軽度に付着するが、齶歯は見られない。切歯は軽度のシャベル状を呈する。

下顎切歯は近遠心方向への傾斜を示す。すなわち歯冠部が右方向に(2|1|では遠心側に、|1|2|では近心側に)倒れるように各々の歯の長軸が傾斜する。

## 3) 計測項目、非計測的項目について

前述のように、本人骨は保存状態があまり良好でなく、厳密な計測が困難なため、可能な範囲で下顎骨の計測だけを行った(表1)。また、頭蓋の形態小変異についても多くの項目を観察できなかった(表2)。

右大腿骨に軽度のピラステル形成がある。右脛骨栄養孔部の横断形はHrdličkaのV型に属する。

## 4) 性別、年齢について

側頭骨乳様突起、下顎骨筋突起などの筋附着部がかなりよく発達していることから考えて、おそらく成人男性の骨格と思われる。

年齢は、8が完全に萌出していること、歯の咬耗度などから、壮年期に属すると考えられる。

## IV 若干の考察

### 1) 推定身長

本人骨において最も保存状態が良好である右上腕骨を用いて身長を推定を試みた。残存する骨体から、解剖頸最下端と滑車外側下端の間の距離 289.0mmが得られた。別の上腕骨(江戸時代人骨)から得られた两点間の距離と上腕骨最大長の比を使いこの上腕骨の最大長を推定すると 330.2mmであった。この右上腕骨の推定最大長から、藤井の式により身長を推定すると 165cmとなる。この値は算出基準となる上腕骨最大長に推定値を用いているため多少正確さを欠く点を考慮すると、推定身長は 163~167cm 程度と考えられる。

### 2) 矮小歯について

観察された遊離歯は、発掘の状況および他の歯との関係からみて、同一個体に属するものと考えられる。従って遊離している1個の矮小歯についても同様に、同一個体に属するものと考えべきである。これを前提とすると、この遊離矮小歯は 1か 3か智歯の矮小歯であるか、または過剰歯のいずれかであろう。第1に 1あるいは 3の矮小歯である可能性を検討してみると、この遊離矮小歯には咬耗が見られないにもかかわらず、1・3に対向する 1と 4に明らかな咬耗が存在する。したがってこの遊離矮小歯は、1または 3が矮小歯化したものではないと思われる。第2に智歯の矮小歯である可能性であるが、藤田(1939)は上顎第2切歯および第3大臼歯に矮小歯の出現頻度が高いと指摘している。本人骨では $\bar{8}$ は歯槽の状態から萌出していないことが確かであるが、8と 8の位置の歯槽は破壊されているため、8か 8の矮小歯である可能性を否定できない。第3に過剰歯である可能性についても、上下顎ともに歯槽の一部が破壊されているため、歯槽の状態からそれを確認することは難しい。しかし、21と 12に見られる歯の傾斜は、3付近の過剰歯の存在によると考えることも可能である。以上の諸点から、今回見られた1個の遊離矮小歯は8か 8の矮小歯または過剰歯のひとつとすることが適当と考えられる。

## V. ま と め

長坂町別当十三塚遺跡4号塚出土の中世人骨は、壮年期男性1個体分と考えられ、推定身長はおよそ 163~167cm と思われる。本人骨に遊離矮小歯が見られた。

### 参 考 文 献

藤井 明(1960) 四肢長骨の長さや身長との関係に就いて。順天堂大学体育学部紀要3: 49

-61

藤田恒太郎(1939) 歯牙の人類学。人類学・先史学講座8: 1-83

表1. 下顎骨の計測値 (単位mm)

( ) 内は推定値、Rは右側の計測を示す

項 目 (項目番号はMartinによる)	数 値
69 (3) 下顎体厚 (R)	15.3
71a 最小下顎枝幅 (R)	35.1

表2. 頭蓋の形態小変異の存否

(-)は欠如、?は不詳を示す。

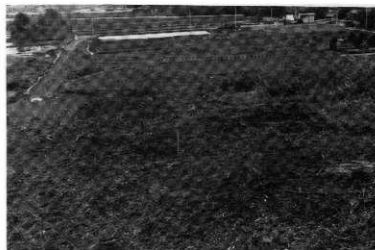
項 目	右	左
内 側 口 蓋 管 骨 橋	(-)	?
鼓 室 骨 裂 孔	(-)	(-)
顎 舌 骨 筋 神 經 溝 橋	(-)	?
副 オ ト ガ イ 孔	(-)	(-)
頭 頂 切 痕 骨	(-)	?

圖

版



1, 別当十三塚  
遺跡遠景



2, 別当十三塚  
調査前



3, 別当十三塚  
調査後





4, 深草遺跡  
第1・2土壙



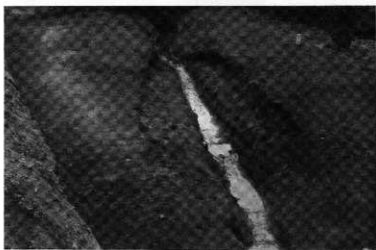
5, 深草遺跡  
第1号土壙



6, 深草遺跡  
第2号土壙



7, 深草遺跡  
溝狀遺構



8, 深草遺跡  
溝狀遺構



写真 1.4号塚1号土壙出土人骨の頭蓋片と歯。

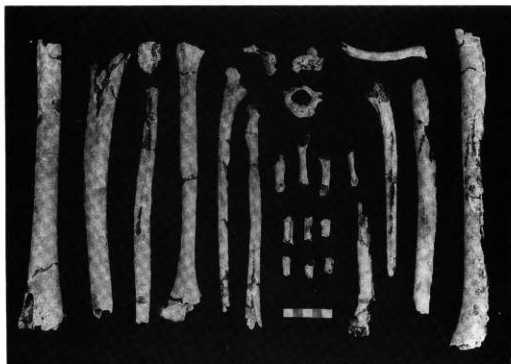


写真 2.4号塚1号土壙出土人骨の椎骨・上肢骨・下肢骨の各片。

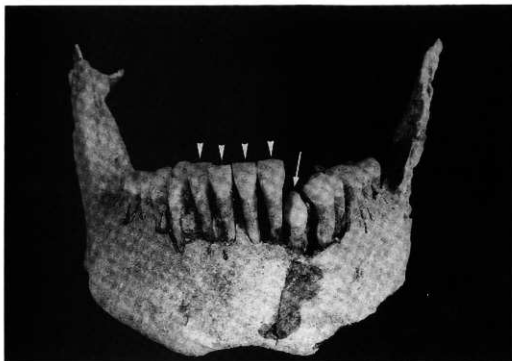


写真 3.4号塚1号土壙出土人骨の下顎骨前面観。短い矢印は右方へ傾斜した切歯4本。長い矢印は矮小歯化した左犬歯。



写真 4.4号塚1号土壙出土人骨の円柱化した上顎左側切歯（写真左）と遊離して発見された矮小歯（写真右）。

